

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 台湾人日本語学習者による座談会の事例研究—司会者の存在が会話の参与構造に及ぼす影響—

A Case Study of Group Discussions by Taiwanese JFL Learners: How a Discussion Leader Affects Participation Framework

doi:10.29714/TKJJ.201212.0008

淡江日本論叢, (26), 2012

作者/Author： 中村香苗(Nakamura Kanae)

頁數/Page： 149-173

出版日期/Publication Date：2012/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201212.0008>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



台灣人日語學習者「座談會」會話之案例研究：
討論引導人對於會話參與架構的影響

中村香苗

淡江大學日文系助理教授

摘要

本研究使用會話分析的方法，詳盡分析日文系三年級生日語會話課中所進行「座談會」的會話特徵。觀察檢証兩組座談會中會話者順序交替模式之時，可確認以下事實。原本應該是自由討論的談話，皆以一致的交替順序進行：討論引導人→被指定的討論者→討論引導人→被指定的討論者。這樣的結果顯示出，儘管討論引導人被賦予許多的任務，所有的學習者特別強烈認同的，是他「指定下一位發言者」的責任。除此之外，討論引導人的存在，限制了「發言所指向的對象是誰」這件事，亦形成了「引導人＝發言所指向的聽者」，以及「其他參加者＝並非發言所指向對象的聽者」這樣的參與架構。以結果來看，座談會只淪為每個人依序表述意見的一種活動，而非參加者互相溝通彼此意見並深化自身思考的活動。

本研究得到的結果，是單純起因於教師在座談會活動中的任務設計與指示方式，或是存有其他的原因（例如學習者本身的日文能力），有待日後的研究來進一步檢視。

關鍵詞： 座談會 會話參與架構 話者交替 會話分析手法

A Case Study of Group Discussions by Taiwanese JFL Learners: How a discussion leader affects participation framework

Nakamura Kanae

Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Using the Conversation Analytic approach, this study demonstrates the structural features of group discussions conducted by Taiwanese JFL learners. Examining turn-taking patterns of two groups' discussions uncovers that the conversations, supposedly "free discussions," consistently proceeded in a particular order (the discussion leader → a nominated participant → the discussion leader → a nominated participant), which reveals all the participants' strong orientation to the leader's role as "a next-speaker nominator." Moreover, the existence of the next-speaker nominator contributes to the construction of the participation framework in which the discussion leader becomes "an addressed recipient" and other participants become "non-addressed recipients." Consequently, in such group discussion activities, each participant made a statement in turns, instead of negotiating opinions with each other. Further research will be required to resolve whether this result can be solely attributed to teacher's task design and instruction or to other factors (e.g., the participants' Japanese language competence).

Keywords: Group discussion, Participation framework,
Turn-taking, Conversation Analytic approach

台湾人日本語学習者による座談会の事例研究 —司会者の存在が会話の参与構造に及ぼす影響—

中村香苗

淡江大学日本語文学系助理教授

摘要

本研究は、台湾の大学3年生の日本語会話授業で行われた学習者同士による「座談会」会話の構造的特徴を、会話分析的手法を使って明らかにした。2組の座談会を、話者交替パターンに注目して検証したところ、自由討論であるはずの会話が、一貫して[司会者→指名された参加者→司会者→指名された参加者]という順番で進んでいることが確認され、参加者全員が司会者の「次話者指名」という役割に強く志向していることが明らかになった。さらに、司会者の存在が「発話が誰に向けられているのか」にも制約を与え、「司会者＝発話に向けられた聞き手」、「他の参加者＝発話に向けられていない聞き手」という参与構造が形成されていることも観察された。結果として、座談会は参加者同士がお互いの意見を深く掘り下げて話し合う活動ではなく、一人ずつ順番に意見を述べるだけの活動になってしまった。

本研究の結果が、教師の座談会活動のデザインや指示の与え方に起因するものなのか、学習者の日本語能力などそれ以外の要因も関わっているのか、今後さらに検証すべき課題も見出された。

キーワード：座談会、会話の参与構造、話者交替、会話分析的
手法

台湾人日本語学習者による座談会の事例研究 —司会者の存在が会話の参与構造に及ぼす影響—

中村香苗

淡江大学日本語文学系助理教授

1. はじめに

近年の第2言語教育の現場では、コミュニケーション・アプローチの理論に基づくプロジェクトワーク (Fried-Booth, 2002) やタスク遂行型活動 (山内, 2005)、協働の学びを推奨するピア・ラーニング (池田・舘岡, 2007) などが盛んに取り入れられている。これらの活動では、従来の権威者／指導者としての教師中心ではなく、学習者主導の学びが重視されている。池田・舘岡 (2007) は、学習者同士が相互作用を通して学ぶ利点として、「他者を通して自分を見直し、自分の理解や考え方そのものの変容が促されたり、新しい考えが生まれたりする」(p. 54) 可能性を指摘している。

このような考えに刺激され、筆者は担当する大学3年生の日本語会話授業で、学習者同士の座談会を行った。用語解説サイト「コトバンク¹」によると、座談会とは「数人が集まり、ある問題を中心に、それぞれの意見を気楽に話し合う会」とある。会の構成や進め方に関して、特に決まった形式があるわけではないが、司会者／進行役がいるのが一般的なようだ。このように、座談会は討論ほど形式ばった意見交渉というわけではなく、しかし話題がある程度限定されているという点で、単なる雑談よりは意義のある「他者との対話を通じた学び」を実現するのに最適な教室活動だと思われた。

実際、筆者が教室で座談会の様子を俯瞰していた時は、学習者全員が発言し、活発に議論が進められているように見えた。ところが、録画した2組の会話を見直したところ、それは筆者が理想とした「話し合い」とは様相が異なるものであった。さらにその要因は、彼ら

¹ <http://kotobank.jp/word/座談会>

が教師の指示を忠実に実行したがゆえに生み出された、座談会特有の会話構造によるものと思われた。

そこで本研究では、会話分析の手法を参考にして、日本語学習者による座談会会話の構造的特徴を明らかにする。特に、座談会の「司会者」の存在が生み出す会話の参与構造に注目し、その特徴と教師のタスクデザインとの関連を論じる。

2. 先行研究

本節では、座談会やグループディスカッションに関する過去の研究の要点をまとめる。Watanabe (1993)は、日本人同士とアメリカ人同士のグループディスカッションの様子を比較し、日米のディスカッションに対する「フレーム」の違いを発見している。具体的には、ディスカッションの開始と終了方法、そして意見や理由の述べ方に日米の相違が報告されている。

日本語学習者を含む座談会の談話行動を分析した論文に、陳 (1994)がある。この研究では、台湾人日本語学習者と日本語母語話者それぞれ3人ずつからなる座談会の録音データを基に、参加者達の行動を話者交替、話題／発話内容、情報の発信者と受信者の関係という観点から検証した。興味深いのは、新しい話題を提供するのも、質問や働きかけをするのも、日本人より台湾人学習者の方が多く、日本人の行動は台湾人からの質問に対する情報提供に集中しているということであった。陳はこの結果を、台日間のコミュニケーションタイプの違いによるものと結論づけている。

一方、Mori (2002)は、アメリカの大学の日本語授業の教室活動の一環として、日本人を招いて行われた座談会の様子を検証している。会話分析を使って、話者交替や発話の連鎖構造を詳細に分析したところ、自由な話し合いであるはずの座談会が、「学習者からの質問」→「日本人の回答」の繰り返しというインタビューに近い形式になっていることが分かった。さらにMoriは、座談会の準備活

動中の学習者 2 人の会話データに遡って、その詳細を検証することにより、座談会で見られたインタビュー形式の会話構造が、学習者達が教師から与えられたタスクを遂行しよう努めた結果であることを明らかにしている。

本研究も、日本語学習者の座談会の会話構造を、会話分析的手法で検証する。しかし、本研究には、上記の先行研究で行われた座談会との相違点がいくつかある。一つは、上記の先行研究全てが、異文化比較や異文化間コミュニケーションという要素を含んでいるのに対し、本研究では、台湾人学習者同士の会話をデータとしていること。それにより、座談会という場面での、文化の違いに影響されない参加者の行動が、より観察可能だと思われる。二つ目は、上記の座談会が全て司会者を立てずに行われたのに対し、本研究は司会者のいる座談会であること。そのため、本研究の分析のポイントは、教師が指示した司会者の役割設定の仕方が、実際に行われた会話の展開にどのような影響を及ぼしたのかを追究することにある。

3. 分析方法

本研究で参考に行っている会話分析は、1960 年代後半から 70 年代にかけて、アメリカの社会学者 Harvey Sacks、Emanuel Schegloff、Gail Jefferson によって確立された研究手法である。会話分析は、発話を一つの行為とみなし、それが発話連鎖のどの位置で、どのように組み立てられているのか、また、その行為に関連して次の発話、さらにその次の発話がどのように展開して行くのかを、綿密な観察によって記述していく。それにより、会話参加者自身が、現行の相互行為をどう解釈し、そこにどう参加し（ようと）しているのかを示すことができる。このようにして、会話分析は、日常何気なく行われている会話の中に、話者交替システム (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974) や行為連鎖 (Schegloff, 2007) など、様々な規範的秩序や構造があることを明らかにして来た。

元来、会話分析は、誰がいつどのくらい話すのかが決まっていな
い日常会話における規範や構造などを解明することに貢献してきた。
しかし、近年では、話者交替の方法などに制約のある場面（例えば、
教育、司法、医療など）での会話の特徴を捉えるためにも利用され
ている（Drew & Heritage, 1992）²。本研究の座談会も、司会者の
存在や事前の話題設定など、明らかに日常会話とは異なる場面であ
り、その特徴を正確に捉えるのに、会話分析は最適の研究手法であ
ると判断した。ただし、本格的な会話分析では、発話中／間の沈黙
や声調の変化、非言語行為など、出来る限り正確に会話を記述し、
非常に微細な現象まで考慮して分析が行われるのに対し、本研究で
は会話分析から主要な概念を採用しつつ、かなり簡略化されたトラ
ンスクリプトを用いて検証している。そのため、本研究の分析方法
は「会話分析」ではなく、「会話分析的手法」と呼ぶのがふさわし
い。

会話分析の主要な概念の一つで、本研究の分析に最も関わりが深
いのが、「会話の参与構造」である。この表現を初めて用いた Goffman
（1981）は、会話は「話し手」と「聞き手」によって行われるとい
う従来の見方を覆し、会話には「語り手」や「実演者」、「承認さ
れた聞き手」、「承認されていない聞き手」、「傍観者」など、様々
なステータスの参加者が存在すると主張した。そして、それらの参
加者が形作る会話の全体図を「参与構造」と呼んだ。ここで注意す
べきは、参加者のステータスは、終始固定された「静的な」もので
はないということである。Goodwin & Goodwin（2004）は、会話
に「参与」すること自体が、会話当事者が展開する発話にどのよう

² これらの研究領域は、「制度的会話」の分析と呼ばれている。制度的会話には
（全てが当てはまるわけではないが）、1）話者交替の順番や発話の長さなど
があらかじめ決まっている、2）参加者がどのような行為を行って良いかがあ
らかじめ決まっている、3）達成すべき課題がある、など日常会話とは異なる
特徴がある。

に携わっているのかを示す「行為」であり、その意味で参与構造とは、「動的に」形成されるものであることを強調している。この点を踏まえつつ、5節の分析では、話者交替パターンの分析を通して、学習者達が形作る座談会会話の参与構造の特徴を明らかにする。

4. 座談会の実施方法

座談会は、日本語専攻の大学3年生の会話クラスで、日本のオムニバスドラマを使った授業のまとめの活動として行われた。このドラマは、何らかの事情で死を迎えた主人公が、人生最後に与えられた「ロスタイム³」をどのように過ごすかがテーマになっている。このクラスでは、キャリアを追求していた主人公が、ロスタイムで元恋人とその子供に出会う話と、最後まで家族のために尽くした母親の話という2話を扱った。1話目の授業の最後に約15分、2話目の最後に約23分、座談会を実施した。

まず、クラスを4人1組のグループに分けた。その際、最初に教師が、比較的言語能力が高い学習者をグループの数だけ司会者として指名した。他の学習者達は、くじ引きで3人ずつ、それぞれの司会者の組に割り当てられた。データは、1話目から1組(Aグループ)、2話目から1組(Bグループ)任意で選び録画した⁴。

1回目の座談会の前に、教師はプリントを配って、「座談会のテーマ」、「座談会の進め方」、「司会者の役割」に関する指示を与

³ サッカーやラグビーで、試合中に負傷者の手当てなどで時計を止めていた時間で、その分だけ試合が延長される。

⁴ Aグループのメンバーは、異性(男性3人と女性1人)で、しかも他学年や転入生から成り、それほど親しいとは言えない間柄であるのに対し、Bグループは女性4人で、そのうち何人かは親しい友人同士であることが伺えるメンバー構成になった。しかし分析で示すように、A, B両グループに同様の会話構造が認められたことから、今回の座談会の参与構造形成には、参加者の性差や親疎以外の要素が大きく関わっていると言える。

えた（巻末付録参照）。座談会のテーマは、2回とも「このドラマのテーマは何か」というもので、もう少し具体的な話し合いの材料として、「このドラマで一番伝えたいメッセージはどんなことか」、「そのメッセージについてあなたは思うか」というサブテーマを与えた。2回目の座談会では、「話し合いに詰まった時のために」という前置き付きでさらに4つのサブテーマを与えておいた。

座談会の進め方については、まず参加者が一人ずつ順番に発言し、全員の発言が終わったら、自由に討論するようにという指示を与えた。

司会者の役割の欄には、（１）話す人を指名する。（自由討論はある程度自由でよい）、（２）自由討論の具合をみて、必要なら介入する、（３）2つのサブテーマを両方話し合えるように進行する、の3つが箇条書きになっている。この3つは、司会者の絶対的な役割ではなく、「自由討論の中で必要ならば司会者が話し合いをリードする」という程度のものであることは、口頭の指示でも説明された。しかし、結果的には、それぞれの参加者が、上記の司会者に対する指示にかなり制約された行動をしていることが観察された。次節でその詳細を論じる。

5. 分析

2組の座談会の発話順番を分析したところ、どちらにも共通の話者交代パターンが見られた。5.1節では、その詳細とそこから見えてくる座談会が話し合いに発展しなかった要因、そして5.2節では、その要因をさらに裏付ける、話し合いに発展した会話場면을検証する。

5.1 話者交替パターン：「次話者指名」による聞き手の特定化

座談会の開始方法として、まず一人ずつ発言すること、司会者は話者を指名すること、という指示があったため、A、B両グループと

も座談会開始直後の発話順番は、[司会者 → 指名された話者 → 司会者 → 指名された話者]の順に進んでいる（抜粋 1、2 参照）。

[抜粋 1⁵:A グループ] (D は司会者)

- 1 D: え:: じゃあ 始めましょう. えっと まず 今回の
- 2 テーマは ロスタイムライフカメラ: マン編の :
- 3 テーマは: 何かって :えっと::: A さんはどう思いますか?
- 4 A: 何 もう一度 いっー [(.) 言ってください. =
- 5 D: [((吹き出す))]
- 6 D: =えっと :: ロスタイム[ライフカメラマン編の
- 7 A: [はい.
- 8 D:=[テーマは何かな
- 9 A: [はい.
- 10 A: テーマは, テーマは何かって言う [ん::

⁵本稿のトランスクリプトで使われているの記号は以下の通りである。

(0.0) 発話中断 (単位は秒)

(.) 0.2 秒以下の発話中断

- 音の詰まり

: 音の延ばし (コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応)

, / . / ? 発話継続 / 下降調 / 上昇調イントネーション

↑ 著しく音の高さが上がる場所

= 前後の発話に切れ目がない場所

[オーバーラップ発話の開始点

(文字) 聞き取りのあいまいな箇所

((文字)) 発話以外のインフォメーション

°文字° 音量の小さい発話

h / . h 呼気音 / 吸気音

< > 発話速度が遅い箇所

- 11 D: [どう思いますか.]
- 12 A: ロスタイの :: んん カメラ編のテーマは やっぱり ::
- 13 あの 命を :: 大事に ::::する ::こと :: です. .h he::
- 14 D: そうですね＝
- 15 A: ＝ふん、そうかな？ hh
- 16 D: じゃあ B さんはどう思いますか？
- 17 B: ん::::: そうです↑ね::::: <やっぱり::>
- 18 んん::::::::::付き合った相手をしあ しあわせにする
- 19 しないと後悔すると思います？
- 20 D: そうですね, ん::: じゃあ hh C さんは？
- 21 C: .H:: ん: 人生は: 一回しかなくー ないから: ん:
- 22 自分: が: 自分ー として: なにか: 大事なことを
- 23 みつー (.) かる＝
- 24 B: ((口を筆箱で覆いながら)) =°見つける°
- 25 C: 見つける 必要があると思います.
- 26 D: そうですね(hh) あの: 命は: すごく重要なんですよ
- 27 じゃあ次は: 一番伝えたいメッセージはど hh んなこと
- 28 でh すh かh?

1 行目で司会者 D は、座談会開始を表明すると、指示されている最初の議題を述べ、参加者 A に順番を振る。聞き取り困難による修復のやりとりを経て(4-11 行目)、A が自身の見解を述べると(12-3 行目)、D は「そうですね」と短い賛同表示をし、A の自問自答のような聞き返し(「そうかな?」)(15 行目)には答えずに、参加者 B を次話者に指名する。B が答え終わると(19 行目)、D は再度短い賛同表示をし、もう一人の参加者 C に順番を振る(20 行目)。C の発言が 25 行目で終わると、D は「命はすごく重要だ」という見解を付け加えて賛同を表明する。そして、すぐに次の話題を提示す

る。同様のパターンは、B グループの冒頭にも見られる（抜粋 2 参照⁶）。

[抜粋 2 : B グループ] (司会者は D)

- 1 全員: いえ :: い Ahah hah hah haha ((笑い))
- 2 D: 一番目の問題は ロスタイムライフ すき焼き編のテーマ,
- 3 一番伝えたいテーマは何だろうか, (A) さん, あの,
- 4 え?
- 5 A: A です.
- 6 D: A さん. どうぞ
- 7 A: はい. えっと一番伝えたいメッセージは, えっと
- 8 たぶん家族が一番大切な人.
- ((中略))
- 11 A: でも空気は一番 必要なものだ.
- 12 D: ((拍手しながら)) 素晴らしい. はい, B さんどうぞ
- 13 B: 一番伝えたいメッセージは. 家族の人は 普通な時は
- 14 母のことは, 普通な時は自分のことだけ考えているだけ
- 15 です.
- ((中略))
- 19 B: たぶんこんなメッセージが伝えたいと思います.
- 20 D: あ, そうですか. じゃ C さん.
- 21 A: ((B の方を向いて)) なるほどなるほど [eh eh heh hehhh
- 22 BCD: [huh huh huhhhh
- 23 C: このすき焼き編は一番伝えたいメッセージは, 家族との絆
- 24 を大切にすることだと思います.
- ((中略))

⁶ B グループは、一人一人の発話が比較的長いため、発話内容の一部は省略している。

29 C: 家族を大切にすることはすごく大事だと思います。

このように、座談会冒頭の発話順番は、単純化すると[司会者 D → A → D → B → D → C]のように進んでいる⁷。これは、座談会の進め方の指示通りであり、当然の結果である。ところが、指示には「全員の発言が終わったら自由討論」とあるにも関わらず、A、B 両グループとも発話順番が一巡した後もこの話者交替パターンが続く。抜粋 2 の続きである抜粋 3 を参照されたい。

[抜粋 3 : B グループ]

- 30 D: ん：いいですね。え、次の問題は、自分にとって家族、
 31 父母はどんな 存在ですか。え：： ん？
 32 ((顔を A に向けて)) だいじょぶですか？
 33 A: はい だいじょぶ。えっと 存在は、さっき言ってた通り
 34 です。空気のような存在です。
 35 D: 自分が家族の空気？
 36 A: ん：：家族。私にとっては 家族は空気のような存在。
 37 とても重要。
 38 D: そう。
 39 A: んん。
 40 D: はい, B.

⁷抜粋 2 の 21 行目では、話者交替パターンの乱れが見られる。ここでは、A が先行の B の発言に対して、納得を表示している。しかし、A の納得表示が B の発言終了からかなり遅れて産出されていること、(トランスクリプトには表れていないが) A が誰かを模しているような言い方をし、直後に参加者全員が笑っていることなどから、A は教師の口癖を面白おかしく真似ただけで、話し合いに参加するために発話順番を取ったわけではないことがわかる。実際、A は発話を続けることはせず、直前(20 行目)で D に指名されていた C が、次に順番を取るべき者として発話を始めている。

- 41 B: 私はね、お姉さんがいますから、お姉さんと何かあった
 42 とき、まずお姉さんと話して、彼女から意見を聞きます。
 43 そして母の方は心から感情なことではなく、たぶん友達
 44 とか学校があることがある時たぶん母に話します。
 45 お父さんの方は普通の時は何も話しませんですが、
 46 私とお父さんは、え？ ((Cに小声で聞く))
 47 D: 気になる？
 48 B: ん お父さんのことは気にしています。普通は何も話し
 49 ません＝
 50 D: ＝私も＝
 51 B: ＝ですが、相手のことが気にしています？
 52 D: んん。 はい、たぶん。
 53 B: たぶん。
 54 D: ん。 じゃあ え？ ((Bを見る))
 55 B: おわり。
 56 D: Cさん。
 57 C: 私にとって家族のみんなはかけがえのない人です。
 58 D: すばらしい：： かけがえの無い。 え？
 59 C: 以上です。
 60 D: 以上です。 はい、じゃ、次は、自分の家族の、え？ これ？
 61 C: だいこくばしら
 62 D: 大黒柱は誰ですか？ ((Aを見る))

30行目で司会者Dは、直前のCの発言に対して肯定的な返答を
 すると、すぐに話題を変えて、話し合いが詰まった時のために与え
 られていたサブテーマの最初の質問をする。そして、視線とレディ
 ネスの確認（「だいじょぶですか？」）によってAを次話者に指名
 する（32行目）。Dとの間の理解確認の修復連鎖を経て（35-6行
 目）、Aの発言が39行目で終わると、Dは次の話者Bを指名する（40

行目)。Bの発言が53行目で終了すると、Dは次の話者指名に移ろうとするが、「え？」と中断してBの発言終了を再確認する(54行目)。Bから明示的な終了の合図を得て(55行目)、Cを次話者に指名し(56行目)、「以上です」という言葉でCによって発言終了が合図されると(59行目)、司会者Dは次の質問を提示する。その際、Dは視線を向けることでAを指名している(60-62行目)。

このようにBグループは、話者交替が[司会者D→指名された参加者]という順で進み、順番が一巡すると、次の話題に移っている。そして、このパターンは、サブテーマの4つの質問が終わるまで続く。Aグループも同様である。抜粋4は、Aグループの司会者Dが、抜粋1の次の話題を提示した場面である⁸。

[抜粋4：Aグループ]

- 41 D: じゃ じゃあ命を大切にすることについてみなさんはどう思い
 42 ますか。
 43 B: 無茶なことはしないことですね::
 44 D: 無茶なことって[例えば
 45 B: [例えば そうですね 中山は最後に撃たれ
 46 た理由として なぜかカメラを渡さないで また写真を撮
 47 って つまりなんか怒らせたような気がする。[相手を。
 48 D: [そうですね=
 49 B: =うん. これって全然命を大事にしてない行為です
 50 からね?=
 51 D: =そうですね=
 52 B: =だから中山は死にました. =

⁸抜粋1の最後にDが「一番伝えたいメッセージは何か」という質問を提示しているが、これに対して他の参加者達が「テーマとメッセージは同じことだ(もうその話題は終わった)」という返答をしている。その後でDが改めて提示した質問が抜粋4の41行目である。

- 53 D: = 中山さんは仕事が大事ですね？
 54 B: ああ。
 55 D: ん. C さんは？
 56 C: んん？ Hhhh ん:::
 57 D: (どうやって:)
 58 C: ちょっと今考え(させて:)
 59 D: はい。
 60 教師: なになに, 話し合いが止まっちゃいました？
 61 D: えっと じゃ A さんはどう思いますか？
 62 A: 命を:: 大事に:: 中山さんはもともと命を大事にしなく-

司会者 D が話題を提示すると、B は指名されずに自分で話者順番を取っている。しかし、B の発言が終わると、結局は D が次の話者を C (55 行目)、A (61 行目) の順に指名している。このように、両グループとも一つの話題について参加者同士で深く論じることをせずに、サブテーマとして与えられていた話題を、全て[司会者 D の質問→参加者が一人ずつ回答]というパターンで終わらせてしまった。この話者交替パターンから言えることは、どちらのグループも、司会者 D は座談会の最中、一貫して「次話者を指名する」という役割に徹していることである。

ここで、さらに発話内容の詳細に目を向けると、D の「次話者指名」に関連した、座談会会話をさらに特異なものにする要因が浮かび上がって来る。それは、D に指名された参加者が次の話し手として発言している一方で、指名されていない参加者が、話し手の発話中「聞き手」としての役割を果たしていないことだ。

日常会話では、話し手の発話途中や発話終了直後に、聞き手がいづちや理解表示、理解確認などの反応を返すことで、相互行為が構築されていく (Goodwin, 1981, 1986 ; 岩崎、2008 ; Schegloff, 1981)。特に意見交渉では、話し手が見解を表明した場合、次に起

こる妥当な発話行為は、聞き手の賛同／不賛同の表明（示唆）である（Mori, 1999; Pomerantz, 1984; Schegloff, 2007）。ところが、今回の座談会では、前の発言内容に賛同しているにも関わらず、他の参加者が次の発話順番を取らない場面が見られる（抜粋 5 参照）。

[抜粋 5 : A グループ]

- 77 D: じゃあ えっと:: このドラマのテーマは命を大切にする
 78 こと: ですよね? ですから えと:: みなさんは もし
 79 命があと数分間しかないなら何をしたいと思います?
 80 C さんは?
 81 C: ん:: 私だったら 家族と一緒に過ごしたいんです.
 82 D: そうですか. 家族と何をしますか.
 83 C: ん:: eheh heh heh .h:: 何をします? .h:
 84 D: mhhh
 85 C: え::と::一緒に ん:: 何でもいいです.
 86 [一緒にいれば いいと思います].
 87 D: [何でもいい
 88 D: そうですか. 家族との時間は大切ですよね? じゃあ
 89 B さんは?
 90 B: ん::
 91 D: どうですか?
 92 B: 私も::C さんと同じ意見です.
 93 D: そうですか. =
 94 B: = はい、家族と一緒に過ごしたいです.
 95 D: ん、そうですか.

司会者 D の「命があと数分しかなかったら何をしたいか」という問いに対し、まず C が「家族と一緒に過ごす」と答える。それに対して、B が同じ意見を持っていることが 92 行目で明らかになるのだ

が、それを表明したのは、Cが見解を明らかにした直後ではなく、司会者Dに順番を振られた後である。

また、日常会話では、抜粋3のBの41～51行目のように、話し手が自分のことを語る「私事語り」（串田、2006）が起これると、しばしば他の参加者が先行の語りに関連した「第2の語り」を展開する（Sacks, 1992, p. 765）。事実、司会者Dの50行目「私も」は、第2の語りに発展する可能性を秘めている。しかし、実際にはDはそれ以上発話を拡張することはしていない。そして、他の参加者が、Bの発話終了時を第2の語りを始める機会と捉えて、自主的に自分の話を語るということも起こっていない。

結局、どちらのグループも、一人の発話に対して反応を返しているのは、ほとんど司会者Dである。つまり、この座談会において、司会者Dのみが「発話を向けられている聞き手」として振る舞っている⁹。このように、[司会者D]→[指名された参加者]という話者交替パターンから見えて来るのは、参加者全員が司会者の「次話者指名」という役割に強く志向するあまり、話し手と聞き手の相互行為的なやり取りから生まれる意見交渉や相互理解の機会が自ずと失われているということである。

5.2 話し合いに発展した場面

5.1節で論じたように、A、B両グループとも[質問—回答]のパターンでサブテーマとして与えられていた話題を全て終わらせてしまったために、座談会活動終了までかなり時間が余ってしまった。そこで、どちらのグループも司会者が新しい話題を提示して会話を進めて行った。ところが、Bグループでは、ある時点でDが司会者の

⁹ 話し手の発話中の視線や体の向きなどからも、発話が司会者Dに向けられていることが確認できる場面が多々あるのだが、紙面の都合上、非言語行為については、別の機会に論じる。

役割を完全に離れて、一人の発言者として参加し、その結果参加者間の意見交渉に発展した場面が見られた（抜粋6）。

[抜粋6 : B グループ]

- 146 B: 特売の商品を買えなかったらどうしますか？
147 D: 私なら豚肉を買います。 hhh
148 ABC: ahah hah hah hah hah hah
149 D: 3万円も え？ 何万円払いました？
150 C: に 2万円？ 20万円？
151 B: 2万
152 D: たか：い
153 B: 2万円。
154 D: 2万円？ おお たか：：い。 え：んん？
155 どう思いますか？
156 A: 私も特選牛肉、
157 B: 私も。
158 A: でも そんなにいっぱいはいわない。
159 D: ええ うん。
160 C: でも どうせ最後の＝
161 B: ＝そう＝
162 C: ＝晩ご飯だから
163 B: 2万円は安い。 hhh
164 C: そう hhh そうそう最後の
165 B: 構わない。
166 D: あ：： でも100万以上節約しました。 え
167 たぶん100万。 ん：：だから2万円を払うのは
168 ちょっとこれは切ないですが無駄に 無駄な感じ。
169 B: んん。

146 行目で B によって提示された質問「特売の商品（牛肉）を買えなかったら（自分なら）どうするか」に、まず D が「豚肉を買う」と答える。それに対して笑いで反応した A, B, C に対して、D はドラマの中で主人公が買った特選牛肉の値段を確認し、それが「高い」という評価を下すことで（152, 154 行目）自身の発言の正当性を主張する。そして、D が他の参加者の意見を求めると、A が「特選牛肉を買う」と答え（156 行目）、すぐさま B が賛同する（157 行目）。しかし、実は A と B の意見が微妙に異なることが、それに続く会話の展開から明らかになる。まず、A が「（ドラマのように）いっぱい買わない」とドラマの主人公との違いを明らかにすると（158 行目）、C が会話に参入し、「でもどうせ最後の」と A に対する不賛同を示唆する発話を開始する（160 行目）。これに B も賛同し、結局 B と C が協同で、「どうせ最後の食事なのだから、特選牛肉に 2 万円費やすのは安い」という主張を構築する。これを聞いた D は、認識の変化を示す間投詞「あ::」（英語の“oh”に相当（Heritage, 1984））で一定の理解を示しつつ、「100 万円以上節約した主人公にとって、2 万円払うのは無駄だ」と異議を唱える（166-8 行目）。

このように（皮肉なことだが）、D が司会者の役割を脱して一人の参加者として意見を表明した途端に、参加者それぞれが互いの意見に対して反応したり、微妙なスタンスの違いを交渉したりするという、いわゆる「話し合い」が展開した。この例からも、次話者指名を担っている司会者の存在が、話し合いの遂行を妨げていたことが再確認できる。

5. まとめと結論

本研究では、2 組の台湾人日本語学習者同士の座談会を会話分析的な手法で検証し、話者交替パターンから見えてくる会話の参与構造を明らかにした。具体的には、学習者達が、司会者に与えられた「次話者指名」という任務に強く志向するあまり、会話が[司会者の質

問]→[指名された参加者の回答]という繰り返しに終始してしまった。その結果、「司会者＝発話を向けられた聞き手」、「他の参加者＝発話を向けられていない聞き手」という参与構造が形成され、座談会は参加者同士がお互いの意見を深く掘り下げて話し合う活動ではなく、一人ずつ順番に意見を述べるだけの活動になってしまった。さらに、司会者の存在がこのような参与構造の形成に影響を与えていたことは、司会者が司会の役を離れた途端に活発な意見交渉が起こった例からも確認された。

Mori (2002) では、教室活動としての座談会において、アメリカの日本語学習者達が、自然な会話をするよりも教師から与えられたタスク指示を忠実に実行することへ意識を向けていたことが報告されているが、本研究の座談会参加者にも同様の傾向が認められた。本研究の結果から、教室活動で意見交渉を目的とした座談会を行う際には、司会者を立てない、または司会者に次話者指名の役割を課さないなどの工夫をするべきであることが示唆される。

しかしながら、この結果が単に教師のタスクデザインや指示の与え方のみに起因するものなのか、はたまた学習者の日本語能力などそれ以外の要因も関わっているのかは、さらに検証が必要であろう。今後の課題として、同じ活動指示のもとで、さらに上級の学習者による座談会や日本語母語話者同士の座談会、台湾人による中国語での座談会を実施し、それぞれの会話構造の比較を試みたい。

謝辞

本論文に対し、2名の査読者より大変有益なコメントをいただきました。深く感謝申し上げます。

参考文献

池田玲子・舘岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門 創造的な学びのデザインのために』 ひつじ書房。

- 岩崎志真子 (2008) 「会話における発話単位の協調的構築—「引き込み」現象からみる発話単位の多面性と聞き手性再考—」 串田秀也他編集『シリーズ文と発話第2巻「単位」としての文と発話』 ひつじ書房, 169-220.
- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』 世界思想社.
- 陳淑娟 (1994) 「座談会のコミュニケーションネットワークに見る学習者の談話行動」 『台湾日本語文学報』 6, 79-102.
- 山内博之 (2005) 『OPI の考え方に基づいた日本語教授法—話す能力を高めるために』 ひつじ書房.
- Drew, P. & Heritage, J. (1992) *Talk at Work*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Fried-Booth, D. L. (2002) *Project work*. Second edition. Oxford: Oxford University Press.
- Goffman, Erving. (1981). *Form of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, C. (1981) *Conversational Organization: Interaction between Speakers and Hearers*. NY: Academic Press.
- Goodwin, C. (1986) Between and within: Alternative sequential treatments of continuers and assessments. *Human Studies*, 9, 205-217.
- Goodwin, Charles. & Goodwin, Marjorie, H. (2004). Participation. In A. Duranti (ed.), *A Companion to Linguistic Anthropology*. Massachusetts: Blackwell Publishing. pp. 222-244.
- Heritage, J. (1984) A change-of-state-token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action:*

- Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press, 299-345.
- Mori, J. (1999) *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese: Connective Expressions and Turn Construction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Mori, J. (2002). Task design, plan, and development of talk-in-interaction: An analysis of a small group activity in a Japanese language classroom. *Applied Linguistics*, 23 (3), 323-347.
- Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In M. J. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press, 57-101.
- Sacks, H. (1992) *Lectures on Conversation. Vol. I & II*. MA: Blackwell Publishing.
- Sacks, H, Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.
- Schegloff, E. A. (1981) Discourse as interactional achievement: Some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences. In D. Tannen (Ed.), Georgetown University Roundtable on Languages and Linguistics. *Analyzing Discourse: Text and Talk*. Washington: Georgetown University Press, 71-93.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.

Watanabe, S. (1993) Cultural differences in framing:
American and Japanese group discussions. In T, Deborah
(Ed.), *Framing in Discourse*. NY: Oxford University
Press, 176-209.

付録

学習者に配られた座談会指示用のプリント

[第1回目]

8. 座談会をしよう！

「座談会」＝数人が集まり、ある問題を中心に、それぞれの意見などを気楽に話し合う会（コトバンクより <http://kotobank.jp/word/座談会>）

テーマ：「ロスタイム ライフーカメラマン編-」のテーマは何か？

- 一番伝えたいメッセージはどんなことか？
- このメッセージについて、あなたは思うか？

座談会の進め方

- 司会者一人、他の参加者3人のグループを作る。
- まずは一人ずつ、自分の意見を述べる。全員が述べ終わったら、自由に討論。

司会者の役割

1. 話す人を指名する。（自由討論はある程度自由でよい）
2. 自由討論の具合をみて、必要なら介入する。
話し合いが止まった→ 別の質問をしてみる
ex. 「印象に残ったシーンは？」
「さっきの〇〇さんの意見はどう思いますか？」

話が逸れた → 「話を元に戻しましょう。〇〇についてでしたね。」

一人だけが話している →
「じゃあ、XX さんの意見はどうか？」
「XX さんもそう思いますか？」

3. 2つのサブテーマ両方話し合えるように進行する。

[第2回目]

8. (もう一度) 座談会をしよう！

「ロスタイム ライフ すき焼き編」のテーマ、一番伝えたいメッセージは何だろう？

話し合いに詰まったら...

座談会サブテーマ：

- ◆ 自分にとって家族（父、母、兄弟）とはどんな存在か。
- ◆ 自分の家族の大黒柱は誰か。
- ◆ どんな時、家族はいいと感じるか。
- ◆ どんな時、家族は面倒くさい、と感じるか。

◇2012 年 10 月 30 日受理 ◇2012 年 12 月 10 日審査通過